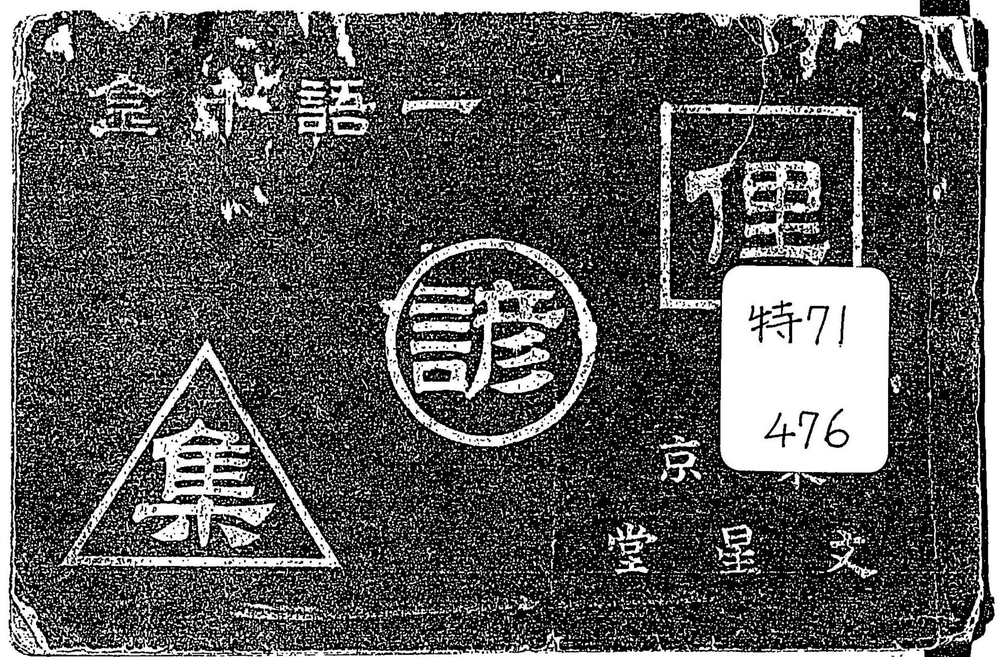


特71
476

300895-000-2

特71-476

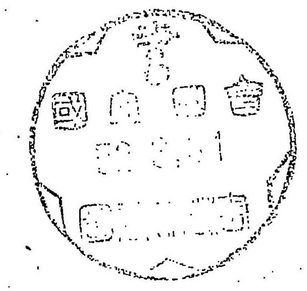
俚諺類集（一語千金）

岡本經朝／編

M39.7

AAB-0004

特71
476



77W10499

世に文章詩歌俳句は勿論狂詩狂歌狂句狂
謔都々逸より議論演説講談落語に至るまで俚諺を借らざること寡なし然れば古來
和漢の俚諺を集めたてこれが材料とした
る書少からずと雖も（近年は西洋の俚諺
をも集めし物多し）未だ二千二百言の俚諺
を聚めし者なく又これを類別したる者な
し世間往々俚諺を誤用し或は誤解する者
蓋この類別なきに依る歟今此書は四類總
て二千餘言其第一類は教訓懲戒の意を含
み事物の次第古今の人情時の風俗景況等
を云ひし者を蒐め第二類は人事の狀態世
事の癖等を云ひし者にて自ら第一類と其
趣味の異なる者を載せ第三類には飲ひて

云ひしものを寄せ。第四類は理に合はざるも能く人口に膾れし者を記す看者ありふれたる俚諺集と同一視することなくば編者の幸これに如かざるなり

明治三十六年十二月　編者識

附記

一此書專ら東京の俚諺を聚めたるは各地方區々の俚諺よりも其全國に廣く行はるゝを知ればなり

一俚諺は固と短語なり西洋の俚諺多くは長し而して其意味十中の八九は我俚諺に異なること無し故に此書は西洋の俚諺を雜へず

一漢土の俚諺に比して古より東京俗間に行はれし者はこれを採りて載せり

一語千金　俚諺類集第一類

昆石　岡本經朝編纂

いの部

一寸の蟲にも五分の魂

一寸先きは闇

一寸延れば尋のびる

一日の師をも疎んずべからず

一日の事は朝にあり一年のことは元日にあり

一字一點を許す

一字千金の價

一時の榮花に千年を延ぶる

一時三里は人の道程

一は萬物の創め

一匹の馬が狂へば千匹狂ふ

一犬虚を吠えて萬犬聲に吠える

一升袋は二升

一文惜みの百損

一藝は道に通ずる

一樹の蔭一河の流

一事が萬事

一程に金三容色

一姫に太郎

一葉落ちて天下の秋

一切食ふ役

一に看病二に藥

一瓜貌に二まろ貌

一身に味方無し

一杯は人酒を呑み二杯は酒酒を呑み三杯は酒人を呑

一平三抱三負ひ（掛軸表裝の巧拙）

一粒万倍となる

一得あれば一失あり

一利あれば一害あり

犬も朋輩靈も朋輩

犬も歩けば棒にあたる

犬は人に附き猫は家に附く

犬になるなら大家の犬になれ

犬の糞と侍が怖ては江戸へ來られない

犬は三日飼はるゝと三年忘れない

色の白いは七難藏す

い

色は年増
色は思案の外
色氣より食氣
色の取持は親より可愛
色男金と力は無し
家よりかま高し
家に盗人を養ふな
家貧くして孝子出る
家に買た太鼓
命ありての物種
命長ければ恥多し
命に換へる財無し
命は寶の寶
石の上にも三年

い

石佛も物を云ふ
石に布團は着せられない
言はぬが花
言はぬは言ふに優る
言ひ出し屁
今時の姉さんは油斷がならぬ
今參り二十日
良い後は悪い悪い後は良い
良所除ちやア食ふ所無い
陰德あれば陽報あり
隱行あれば照名あり
生る犬は死たる虎に勝る
岩も物言ふ
何時も月夜と米の飯

いろは

怒るは敵と思へ
嫌な奴も離縁した時は三百文損した心地
する
伊勢屋稲荷に犬の糞（江戸に多き物）
淫婦に石女多し
蟹の頭でも頭になれ
即形は首と釣替へ
鰯の頭も信心から
急がば迂遠れ
戴く物は夏もお小袖
衣食足りて禮節起る
醫者の不養生
因果覿面
痛けりゃ放せ

ろの部

井中の蛙太海を知らず
膝行三百文（轉居費）
家を負ふ者其臭きを言はず

ろの部

論より證據
内親不和なれば其家治まらず

はの部

白痴につける藥無し
白痴の大食ひ
白痴と鋏は使ひやうで動く
白堀ほど飾い者は無い
白痴に構ふと旦那が尊る
白痴と相撲には勝たれない

ねろは

は

花より團子

花は櫻木に人は武士

花のお江戸

花も物を云ふ

花に嵐の障あり

坊主が憎けりゃ袈裟まで憎い

坊主の鉢巻き ア締りが無い

八せん八日間日四日

八十八夜の別れ霜

早く覚える者は早く忘れる

繁昌の地には草生えず

箱根八里は馬でも越す

始あれば終あり

祖母育ちは三百文値が下る

裸で道中はできない

腹も身のうち

橋無き小川は渉られない

旗本八万騎（徳川幕府臣下の数）

番町に居て番町知らず（東都麹町區番町）

差を差と思はない者は恥かいた例がない

流行物は廢れる

噺半分に聽く

博奕は勝てば仕度く負でも亦仕度し

鳩に三枝の禮あり烏に反哺の孝あり

謀略は密なるべし

に

女房と盛は新しいが良い

女房は家の寶

に

女房は家の道具

女房は墓所から貰へ

二八月は船頭の俤み時

二足の草鞋はかれない

二挺櫂べなら歩ともしろ（將棋の語）

二歩は唯取り（將棋の語）

人を見て法を説け

人間纔五十年

人間萬事塞翁の馬

逃るる者道を撰まず

逃るが一の手

憎まれ子世にはびこる

憎い鷹にも餌をかへ

鶏の口となるも牛の尻となるな

鶏突くして水に登る（碁の語）

似た者夫婦

日光見ないうちは結構と云ふな

ほの部

惚て通へば千里も一里

惚た惚目で好く見える

惚られたが因果

佛も原は凡夫なり

佛放とけ神構ふな

凡夫盛りに神祟り無し

凡夫も悟れば佛になる

骨を砕つて皿におよぶ

奉公人根情

本所に蚊が無くなれば大晦日

ほ

へ

子子も虫のうち　大神宮

ほつ〳〵三年波八年（畫工の語）

帆影八里船端三里

煩惱は首にのる

法華が佛になれば牛の糞が味噌になる

への部

拙手の考へ休むに肖たり

拙手のよこ好き

拙手の長談義

拙手な鍛冶匠も一度は名劔

拙手も眞珠星（射手の語）

拙手の道具伊達

拙手の中飛車角の取替へ（將棋の語）

拙手將棋王より飛車を大事がる（將棋の語）

拙手碁にだめ無し（圍碁の語）

拙手の永捨き百目の損（圍碁の語）

屁を放て磬すぼまる

屁一放は藥千服に當る

蛇に足無し魚に耳なし

平家を亡ぼすは平家

辨慶の泣き所

との部

遠くの親類より近くの他人　各自ノ負モルヲ支ヘバ蟷蜋ニ制セラル

遠ぐて近きは男女の道

遠き思慮なきは近き憂あり

遠きに行くは邇きよりす

富む家に痩犬なし

富は一生の財智は万代の財

富むと雖も貧を忘るな

富む者仁ならず仁をすれば富まず

虎は千里の敵を越える

虎は死して皮を遺す

虎を飼つて患を忘るな

隣家の組紬味噌

隣家の財を算へるな

隣家の飯は旨いもの

隣家の痛氣を頭痛にやむ

時の役人日の奉行

時に遇へば鼠も虎になる

時は得難く失ひ易し

燈火消えんとして光を増す

燈臺基哮し

登心を少くして油を多くせよ

毒藥變じて藥となる

毒を食はば皿まで

兎角近所に綣なかれ

兎角村には綣なかれ

鳥を食ふともどり食ふな

鳥の一穴

盜人にも三ツの道理あり

豆腐で齒を痛める

年はとり度もの

飛で火に入る夏の虫

土手八丁（江戸吉原堤）

聞ふに落で語るに落ち

所變れば品變る

ち

東海道五十三驛中仙道六十九驛

同氣相求め同病相憐れむ

時世時節

十室の邑にも忠臣あり

ちの部

地獄の沙汰も金次第

地獄も住家

地獄にも知る人あれ

地藏の貌も三度撫れば腹を立つ

地震雷火事親父（怖しき者）

地入れば濕入る（碁打の語）

女郎却て客となる

女郎買ひの棒味噌汁

女郎に誠があれば晦日に月が出る

親しき中にも禮義あり

親しき中にも垣を結へ

茶腹も一ッ時

智無き者は木石に等し

智惠は小出しにせよ

小さくとも針は呑まれず

塵積つて山となる

狎猫婆子供嬢や〳〵（宴席の禁物）

忠臣二君に仕へず貞女兩夫に見えず

長者に貧を語るな

父の恩は山より高く母の恩は海より深し

千引の石は動かすとも親には贏れず

治にゐて亂を忘るな

りの部

り

兩葉にして斷ざれば終に斧を用ふるに至る

兩方聽て平知をせよ

兩方立れば身が立ず

律義者の子澤山

理を被る法はあれども法を破る理は無し

長貪は樹を撰んで棲む

怜悧な子より白痴な子は尙ほ可愛

利息を取るより利息を拂ふな

ぬ の 部

盜人を捕へて見れば我子なり

盜人の晝寢

盜人の番には盜人を使へ

盜人だけ〳〵

盜みする子は怠からで繩掛る人が恨めし

る の 部

糠を砥つて糟に及ぼす

濡れぬ先こそ露をも厭ふ

瑠璃も玻璃も照せば光る

類は友を呼ぶ

を の 部

女の目には鈴を張れ男の眉には糸を引け

女氏無くして瑤の輿に乘る

女怜悧して牛賣り損なふ

女寡に花が咲き男鰥に蛆が蛹く

女の心と秋の空は變り易し

女の年始は三月まで

女の妬忌なきは百の拙きを掩ふ

女の猿智惠

を

女の髭（は大象も駐る
女は三界に家無し
女に七去あり（大寶令）
女ならでは夜も日も明けぬ
男の四十は分別盛り
男の兒は父に從ひ女の兒は母に從ふ
男の睾丸女の乳房（要害）
男は敷居を跨げば七人の敵あり
岡目八目强し（碁打の語）
岡崎女郎衆は良い女郎衆
教へるは學ぶの半
驕る者久しからず
夫に對して唾を返すな

おの部

お

親の光りは七所照らす
親の恩は返せるが水の恩は返せぬ
親は無くても子は生長つ
親の因果が子に報ふ
親の慈目
親の心を子は知らず
親亡き後は兄が親
鬼の目にも涙
鬼の女房に鬼神がなる
鬼も十七番茶も飯
鬼も頼めば人を食はない
鬼も見馴れるが宜し
己は言はぬが汝言ふな
己の天窓の蠅を追へ

お

己を責て他人を責るな

己他人の親を敬へば他人亦己の親を敬ふ

思ふ中の小事ひ

思ひ理にあれば色外面に表はる

思ふ人には羅さるゝ

思ひたつ日が吉日

落れば同じ溪川の水

落てゐる物を拾ふな

落たる後に高みを怖る

落武者は芒の穂におぢる

夜男惣身へ惣惠が回り兼れ

夜取すると小取せよ

負つた子より抱た子

負ふと言へば抱る

煽動と贅には乗りたくない

重荷に小附をする

蝌蚪は蛙になる

陰陽師己の身の上を知らず

臆病者は怖はし

除算して虎を獵る者は其皮を剝んが爲

わ の部

我身を捻つて他人の痛さを知れ

我身の事は他人に問へ

我身を立んとせば先他人を立よ

我榮樂の釜盥

我他人を敬へば他人亦我を敬ふ

我寺の佛尊し

禍も三年經てば用にたつ

わ

か

禍は口より起る
禍は下民より起る
悪い道には入り易い
悪い事はできないもの
笑つて損する者無し
笑ふ門には福來る
破鍋に綴蓋
若年時は二度無し
和歌に師匠なし
盤り八目の得（碁打の語）

か の部

金持と灰吹は溜る程汚し
金が敵の世の中
金の無いのは首の無いより憂いもの

か

金保證すると人保證するな
金さいあれば天下に敵なし
金無きものは金を浪費ふ
金は火で試み人は酒で試む
可愛い子には旅をさせろ
可愛い子は棒で育てろ
可愛さ餘りて憎さ百倍
可愛がられて身の迫り
可愛けりやこそ神田から通ふ
河だちは河で果る
孝は百行の本
孝の終りは父母を顯はす
孝行を爲んと思へば親ば無し
學者の不身持

學者なにおを恐れる

學者むしやくしや

上を學ぶ下

上方贅六に廣島乞食

上方者は氣が長く關東者は氣が早い

蛙の子は蛙

蛙も歌の仲間なり

借衣せんより洗衣せよ

借る時の地藏貌

堪忍五兩貢て三兩

堪忍は無事長久の基

皮の有るうち骨を見よ

皮を引けば身が痛む

齡て兜の緒を締ろ

勝事ばかり知て負ることを知られば害あり

厩に長少の列あり

厩が立てば糞蠅も羽づくろひす

好事門を出でず

好事魔を出だす

蟹は甲に肖て穴を堀る

枯木も山の賑やかし

籠の鳥雲を戀ふ

風邪は百病の原

壁に耳あり障に口あり

烏の天窓の白くなること無し

龜の甲より年齡の功

形は生めども心は生まず

鉦も鐘木のあたりやう

歌人は居ながら名所を知る

鴨寒くして水に入る

痞と虱は隠すと殖る

看版に偽り無し

稼ぐに追付く貧乏無し

貌に似ぬは心

郷に入ては郷に従へ俗に入ては俗に従へ

書たものは物を言ふ

貸た物は忘れぬもの

兜輪に乗る人臭ぐ人

癩病の鼠うらやみ

片口聽て理をつけるな

無筆者理に疎し

髪結者髪ゆはず

神は非禮を受けず

諫言耳に逆らふ

刀は武士の魂鏡は女の魂

頭を堅に振る相撲の女

角じゃ世間が渡られず

敵の家に行ても口を濡さず

雷は鳴る時ばかり襟を付け

加賀邸の盲目長屋（江戸本郷の邸）

高島死して良弓藏る

隱すこと顯はれ易し

よの部

夜目遠目笠のうち

夜半に風あり

夜道に日は暮れず

ま

弱り目に祟り目

弱きを助けるは東國の常

能く游ぐ者は溺れる

能く射る者は又能く防ぐ

用心は臆病にせよ

讀みと歌

管ツ張りの朝寝坊

嫁が姑になる

吉原が明るくなれば自家が闇

慾に項無し

世の中は沈相持

四隅取られて碁を打つな（碁打の語）

た

太は小を兼ねるも長持は枕にならず

大海は塵を撰まず

大魚は小池に棲まず

大聲は俚耳に入らず（大聲は音樂の名）

大功は細瑾を顧みず

大孝は孝ならず

大奸は忠に似たり

大慾は無慾に近し

大智は智ならず

大謀は謀ならず

大勇は勇ならず

大利は利ならず

大皷も撥の當りやう

大厦の覆らんとする時一木を以て支へ難し

財無くして町に臨むな

財は永持なし才智を財とせよ
財悖つて入れば悖つて出る
他人のさる似
他人の飯には骨がある
他人は怖い者
旅は憂いもの辛いもの
旅の恥はかき捨て
旅は道連世は情
立ち寄らば犬樹の蔭
立つ鳥跡を濁すな
立てぬる者は親でも使へ
鷹は死でも穂をつまず
蠅が飛べば糞蠅も飛ぶ
鷹匠の子は能く鳩を馴す

足ることを知れ
足ちぬは餘るより善し
高い所へ土持ちをする
高きに登るは低きよりす
尊ひ寺は門から知れる
蹇喰ふ虫も好きずき
狸に牝なし貉に牡なし
短氣は損氣
撓るならば若木のうち
伊達者の薄衣
多勢に無勢は敵はず
只程安い物はない
種なき手品は使はれず
欺すに敵なし

玉磨がされば光なし

禮過れば諛諂となる

[illegible]の部

袖ずり合ふも多少の緣

總領の甚六

損して得をとれ

つの部

月夜も十五日闇もす五日

明夜に釜を抜かれる

月に村雲花には風

釣すると網するな

釣合はぬは不緣の原

釣落した魚は大きい

釣は釣れても復行たく釣れぬも復行たし

鶴の一聲雀の千聲

鶴は枯木に巣を編す

聾耳の早耳

聾耳太聲

爪なく爪に爪あり

使ひは便はず

妻戀ふ鹿は笛に寄る

頭寒足熱（平素の攝生法）

附燒刃は後にだす

嚙く石も緣の端

角を直さんとして牛を殺す

ねの部

念力は巖も貫ず

念には念を押せ
粘りても餅屋の嗅は功者
寢るが極樂
鼠に投るに器を忌む
熱しても惡木の薪に愈はず
猫の寒戀

ね の部

七度尋れて他人を疑へ
七轉び八起き
七歳八歳は憎まれ盛り
七歳小女郎が八歳子を產む
無い袖は振れぬ
無いは異見の總仕舞
無い物喰ふが人の癖

無て七癖有て四十八癖
長居は恐れあり
長い者には卷かれる
夏の感冒は犬も食はない
夏の雨は馬の背を別ける
生兵法大疵の原
生酔本性違はず
泣く子と地頭には勝てぬ
泣く面を蜂がさす
梨の尻に柿の頭（旨き所）
梨の皮は乞食に剝せ瓜の皮は大名に剝ぜろ
男女は自ら授け受けず
男子病む時は家衰へ女子病む時は色衰ふ
成らぬ堪忍するが堪忍

ら

成ると成らぬは自元で知れる
媒妁は宵のもの
媒妁言は當にならない
習ふより馴れろ
恤は他人の爲ならず
永い浮世に短い命
懶惰者の節句働き
名は體を表はす
涙花の蔦は伊勢の濱荻
投た袂に答は無い
汝に出て汝に返る

らの部

樂は苦の種苦は樂の種
樂あれば苦あり

樂な人は若く見ゆる
落書の國所は櫚干にとゞまる
落書に名筆なし
落花は枝に返らず

むの部

無理が通れば道理引込む
無藝大食
紫は朱をうばふ
紫はさめ易し
昔時とつた杵柄
昔は昔今は今
木樂は磨ても黑し

うの部

牛に牽れて善光寺詣り

牛は牛連れ

牛は願ひがらで鼻へ藤を貫す

牛の小便十八町（長きを云ふ）

生みの恩より育ての恩

生れぬ前の磯祿定め

生れながら尊き者無し

嘘吐は盗賊の始まり

嘘らしき嘘を言ふとも眞言らしき嘘を云ふな

嘘も方便

寶物には花を飾れ

寶家を唐様でかく三代目

寶言葉に買言葉

馬を指して馬無し

馬士船頭お乳の人（目の離せぬ者）

卯腹辰股寅背中（炙を忌む日）

兎袁られて狐患ふ

自惚と瘡氣の無い者無し

海の事は漁師に問へ

魚心あれば水心あり

梅は香に櫻は花

運は天にあり牡丹餅は柳にあり

打てば響く

謠ふも舞ふも法の聲

上を見れば放圖が無い

氏より育ち

噂をすれば影がさす

瓜の蔓へ茄子はならぬ

うのく

遇れば變る世の中
怨みは恩で報せ
憂あれば歎びあり

美味ものは宵に喰へ

のの部

飲酒と賭博と傾城買は男の三道樂

飲まれば藥も功能なし

飲食には他人集り憂苦には親族聚ふ

飲むに減らずに吸ふに減へる

能字筆を撰ます

能ある鷹は爪を藏す

咽元過れば熱さを忘る

明き八文

くの部

口は禍の門舌は禍の根

口には使はれる

口から高野へ行く

口は調法な物

口に物は費らず

苦しい時には親を出せ

苦しい時の神憑み

苦しい時には鼻をも刮ぐ

苦樂は生涯の道連れ

臭い物には蠅がたかる

臭い物身知らず

臭い物には蓋をせよ

公方八百万石（徳川幕府）

公卿の位たふれ

公卿にも破衣

國に入ッては禁を問へ

國に盗人家には鼠

國亂れて忠臣顯はる

關東の食倒れ西京の衣倒れ

關東の連小便

藥能書ほど効かず

藥九層倍の餘瀧

光陰に關守無し

光陰人を待たず

火事は江戸の花

火事と葬式に行けば勘當も許りる

腐ても鯛

禍福は門無し

瓜田に靴を入れず李下に冠を直さず

食はず貧樂

靴新じと雖も冠と同うせず

海月も骨に逢ふ

筵い所へ水溜る

唇亡びて齒寒し

鯨一匹捕れば七濵潤ふ

愚者も一得

果報は寢て待て

九十九久保に百本多（德川幕府の臣）

豕は衆に敵せず

車は三寸の轄を以て千里を行く

勸學院の雀蒙求を囀ずる

君子は危きに近寄らず

や の 部

燒木杭には火が付き易い
燒た跡は建つが死だ跡は立たない
燒野の雉子夜の鶴
病た知れは癒るに近し
病は口より入る
病は癒るに怠たる
安物買ひの錢失ひ
安からう惡るからう
痩腕にも骨あり
痩ても枯ても元が元
闇は綾無し
山高きが故に貴からず水有るを以て貴し

ゆ

柳に雪折なし
鎗持鎗を使はず
野夫にも功者あり
養子には嫁の上へ帶を締た者をもらへ
やはり野に置け蓮華草

よ の 部

徒てば甘露の日和あり
徒つ身より待たるゝ身
負るは勝つ
負碁の打ちよさ（碁打の語）
密夫代七兩二歩
密夫を知らぬは亭主ばかり
万卒は得易く一將は得難し
曲られば世に立たれず

け

貧しき者妻を擇まず
蒔かぬ核は生えぬ
隨意に成らぬが浮世のならひ
馬士にも衣裳髪形
孫を可愛がるより犬を可愛がれ
丸い雞卵も切やうで四角
松は一寸にして棟梁の性あり
守人に隙があるも盗人に隙無し

この部

下司の智惠は後から
下司の一寸のろ間の三寸白痴の明放し
下司の唇と夜着の袖
下月の建たる蔵もなし
傾城の千枚起證

傾城に眞實なし
傾城のそら泣き
桂馬の高上り歩の餌食（將棋の語）
桂三個特て負ること無し（將棋の語）
喧嘩兩制酬
喧嘩同士の軒並び
毛物は朝（食獸を他家へ遣る時を云ふ）
毛深い者は色深い
藝は身を助ける
今日は他人の上明日は我身の上
言行一致し難たし
煙りあれば火あり

ふの部

武士は食はずとも高楊枝

武士に二言無し
武士は相み迭ひ
武人他人を誚る

河豚は食ひたし命は惜し
河豚は悪女で鯨の味

般乗は板子三尺下地獄
船は船頭に任せろ

夫婦喧嘩は犬も食はない
古川に水絶えず

不精者の節句働き
振れで鯖へる果報者

史は遺たし書く手は持たず
歩の無い將棋は負將棋（將棋の語）

不自由を常と思へば不足無し

こ の 部

子を視るは親にしかず
子を捨る藪あれど身を捨る藪無し

子は三界の頸ッ枷

子を持て知る親の恩

子を持てば七十五度泣く

子故に闇に迷ふ

子持の腹には馬の鞋もはいる

子供に飢饉無し

子供も猫には負し

子寶

子煩惱に子無し

子は夫婦の間の鍵

心二つに身は一つ

心は持ちやう

心ほどの意を經へる

心に望起らば困窮した時を思へ

戀に上下の差別無し

戀するより德をしろ

戀はくせ物

戀の遺恨と食物の遺恨は恐ろしい

故郷忘れ難し

故郷には花を飾れ

故郷には錦を飾れ

紺屋の白袴（昔時は紺屋も袴をはきたり）

紺屋の明後日

紺は藍より出て藍より青し

米屋と質屋は三代續かず

米屋は三度目に變へろ

米が騰ると家賃が下る

碁將棋に凝ると親の死目に逢へぬ

碁うちに時無し（碁打の語）

碁で負て將棋で勝つ

白痴の一心

白痴の後思案

乞食の子も三年たてば三歳になる

乞食を三日すればやめられない

語は國の手形

語多きは品少なし

五福の中壽を以て先とす

小袋と小娘は油斷がならない

嫉一人は鬼千疋に當る

と

轉ばぬ先きの杖
凝ては思案に能はず
下向女に反り男（美風）
粉糠三合持たら養子に行くな
志ざしは松の葉
弘法にも筆の誤り
講釋師見て來たやうな嘘言を吐く
腰張強くして家を倒す
怖い物見たし
孔子も時に適はず
後悔先きにたゝず
蔫の上にも三貫（出産の費）
氷は水より出て水より冷し

ね の 部

江戸の中央は土一升金一升
江戸は四里四方
江戸は八百八町大坂は八百八橋
江戸は物見高い
江戸紫に京緋色（染色の名所）
江戸は火事早い
江戸ッ子は氣が早い
絲は異なもの味なもの
絲と月日は待つがよし
絲無き衆生は度し難し
英雄淫事を好む
英雄他人を欺く
英雄並び立たず
幼にして父母に從ひ嫁して夫に從ひ老て

子に從ふ（女の三從）
醉醒の水は甘露の味
燕雀鴻鵠の心を知らず

ゑ の 部

遠州濱松は廣いやうで狹い
遠州濱松は女の夜這ひ
遠州のなんなら茶漬（來客になんならお茶漬を上れと云ふ）
遠慮は不沙汰
遠慮ひだるし伊達寒し
畵そらごと
餌に啼く鳥は巣立ちせず
笑みの中にも劍あり

て の 部

天に口無し人を以て言はしむ
天に私無し
天に二日無し
天道は盈るを虧く
天道は足らざるを補ふ
天道人を殺さず
天下は一人の天下にあらず
天下廻り持ち
天知る地知る
天法八ツ當り
天網逃れがたし
手書あれども文書なし
手前味噌鹹し
手盛り八杯

て

手の無い將棊は負將棊（將棊の語）
手の無い時には端の歩なつけ（將棊の語）
出物腫物場所嫌はず
出る杭は打たれる
書翰はなるべく敬ッてかけ
提灯持者は先きに立て
亭主の好な赤烏帽子
喋々しいはさめ易い
書六十歳まで上達る

あ の 部

悪事千里を走る
悪女の深情
悪銭身に着かず
悪妻は六十年の不作

悪言の玉は磨き難し
悪を見たらば忽ち避けよ
悪獣も猶その類を恩ふ
悪を好む所には必ず餘殃あり
朝焼の宵惑ひ
朝早く起る家は榮えるの兆ない
朝起きは三文の得あり
朝生薑夕山椒（眼の薬）
天窓を剃るより心を剃れ
天窓冗ても水氣はやまぬ
當ろも八卦當らぬも八卦
當事と越中褌は向ふから外れる
合縁奇縁
合せ物は離れ物

あ

逢ふは別れの始め
逢ふた時に笠を脱げ

秋の鹿は笛に寄る

秋茄子は新婦に食はすな

蟻も天へ登る

蟻も念力は天まで達く

雨はれて笠を忘る

雨降て地固まる

相手の無い喧嘩はできない

明日は明日の風が吹く

案じるより産むが易い

暑さ寒さも彼岸まで

東國男に京女

有さうで無いのが金無さうで有のも金

垢に食はれて死にはせぬ

麻の中の蓬は直なり

油盡きて燈火消る

阿漕が浦に曳く網も度重れば顯はる

預り主は半分

鷸鴫能く物を云ふも鳥類を離れず

讐を恩でかへせ

華厳魚の鉤し切り

飽くを知らぬ鷹は爪を裂く

近江盗賊に伊勢乞食

網して龜を捕るは其甲を取らんが爲

さ の部

三月の花見風

三月比目魚は貰ても食へない

さ

三月の花曇り（大陰暦の三月頃曇天多し）
三月の下り紙鳶（江戸にては正月より三月末迄風を翫ぶ）
三十六計逃るにしかず
三千振袖四十島田
三十九じやもの花じやもめ
三人寄れば文殊の智恵
三人で歩くと仲間外れが出來る
三寸息絶れば萬事休む
三年にして子無き妻は去る（七去の一）
酒は煖着は刺身酌は端嬙
酒は百薬の長
酒は憂の玉箒
去る者日日に疎し

猿も木から落る
猟らぬ神に祟無し
山椒は小粒でも辛い
坐して食へば山も空し
竿が三年櫓が三月（船乗りの語）
里腹三日
細工は流々仕上を御覽じろ
鯖の生腐れ
遊里の金には逼るがならひ
境に入ては禁を問へ
盛んなる者は衰ふ
草加越谷千住の先き
先んずれば人を制す
才子に病多し

寒き者衣を擇まず

産三兩に死五兩（入聲）

向きは左程に思はない

佐竹の七ッ藏（江戸下谷三味線堀の屋敷）

桑田變じて海となる

巻の部

昨日は今日の昔

昨日測たも今道心

昨日の淵は今日の瀬

樹の實は元へ落る

樹を接がば花も猶縮むべし

窮鳥懷に入時は獵師も之を捕らず

窮鼠却て猫を食む

聞くは一時の恥聞かぬは末代の恥

聞て極樂見て地獄

兄弟常に合はず慈悲を兄弟とせよ

兄弟は他人の始り

義理と嬪鼻禪は闕かれない

義理と人目

氣で氣を病む

氣は精神

君辱しめらるれば臣死す

君を思ふ身を思ふ

九層の臺も地下より

畢丸も鉤りかた

裂ても錦

絹糸三寸繩一尺（棄ずに蓄へ可きもの）

器用貧乏

雉子も啼ずば射れず

京にも田舎あり

鬼神に邪曲無し

麒麟も老れば駑馬にしかず

疑心暗鬼を生ず

ゆの部

雪の翌日は蝶虫の跳梁

雪は豊年の貢

雪歴して松の操を知る

勇士は鼙の音に目を覺す

勇將の下に弱兵無し

柚が黄色くなれば醫者が青くなる

油斷は大敵

往大名に歸り乞食（遊女通ひ）

湯の辭義は水になる

弓するとも寐鳥を射ず

めの部

目の寄る所へ玉が寄る

目八寸（眼力の長所）

目も口程に物を云ふ

眼病み女に風ひき男（粋な者）

眼病の一週は七十日

盲人千人目明千人

盲人蛇に怖ず

盲人も京へのぼる

盲人滅法界

名人他人を誉らず

名馬には癖あり

めみ

命は食にあり
命は義によつて輕し
雌雞勸めて雄雞時を告る

みの部

水清ければ魚栖まず
水は卑きに流る、
水は方圓の器に從ふ
水の流と人の末
水戸邸の百軒長屋（江戸小石川の邸）
水戸ッ生は强情
身は身で通ふ
身を捨てこそ浮ぶ瀬もあれ
身さへ心に任せない
身あれば命あり

見るは豐樂見らるゝは因果
見るは目の毒
見やう見眞似
見ぬ物清し
見られぬと言ふ程見たいもの
三歲子の魂百歲まで
美目より心
蜜柑が黃色くなる時節には醫者の貌が青くなる
實の生る木は花より知れる
盈れば虧る世の中
右を踐めば左が上る
彌陀の光りも金次第

しの部

し

十篇讀むより一篇寫せ

十人寄れば十種

十五六の處女は箸の倒れたにも可笑がる

十三ばくり毛十六

十年一ト昔

十九たちまち二十日宵闇

十目の視る所

十月の戸たて醫者

死は易く生は難し

死ぬ者貧乏

死では花が咲かない

死人に口無し

死すべき時に死ねば死に優る恥あり

四貫相場に米八斗

四十歳くらがり（男女四十歳にして眼力衰ふ）

四十歳腕

四十男の浮氣と七時下の雨はやまない

四百四病の煩よりも貧程憂物はない

正直の頭に神宿る

正月小無し二大無し（陰暦に言ひし事）

正法に不思議なし

大蛇は千年にして斷で復繼ぎ狐五百年にして能く生をかゆる

大蛇の道は蛇が知る

大蛇は一寸にして人を呑むの氣象あり

知らぬが佛

知らずば半分値

し

巧手の掌てから水が漏る

巧手あれども名人無し

商賣供敵

商賣は原價にあり

仕事は多人數でして食物は小人數で食へ

仕事は神田でお飯は越後

七人の子を生すも女に肌を許すな

七尺去て師の影を踐ます

自業自得

自慢高慢白痴の中

人家千軒あれば相持に生活せる

人跡繁ければ山も凹む

品川女郎衆は十匁

品川海苔は伊豆の磯餅

し

書は言を盡さず

書毎に信ずれは書なきにしかず

春三夏六秋一無冬

春宵一刻價千金

主が主なら家來も家來

主と病には勝てない

獅子は生れて三日にして虎を喰ふの氣象あり

朱に交はれば赤くなる

舌三寸に胸三寸

親は憂苦寄り

信心も德の餘り

師は三世の契夫婦は二世

勝負は時の運

し

芝居は無筆の學問

沙彌から長老にはなれない

字を知るは憂の始め

赤辭三年又三年治て三年又三年

職人貧乏他人財

詩を作るより田を作れ

鹿追ふ獵師山を見ず

賀屋は壘の上の車力

常上着のはれ衣無し

霜枯れ三月

將を射る者先づ馬よりす

衆口金を鑠かす

邪は正に勝たず

士は己れを知る人の爲に死し女は己れを

獣ぶ者の爲に形づくる

戯談にも程がある

仁には敵無し

征知らずは碁をうつな（碁打の話）

尺蠖の屈むは伸んが爲

ひ の 部

人の口には戸が立てられない

人増せば水増す

人には添て見よ馬には乘て見よ

人の噂も七十五日

人は見掛によらないもの

人は一代名は末代

人は神のおすゑ

人は岩木にあらず

人は相應せよ

人は和にしかず

人は善惡の友になる

人は萬物の靈

人を見たら盜人と思へ

人は老小不定

人喰馬にも合口あり

人に一癖あり

人肥へたるが故に尊からず

人を許すとも己を許すな

人は病の器

他人の猿鼻褌で相撲をとるな

他人の牛蒡で佛事をするな

他人の財布で鰐口を鳴らすな

他人の弓は彎ぐな

他人の尻馬に乘るな

他人の棚卸しをするな

他人の畑に入るな

他人の鳴には指でもさすな

他人の馬には乘るな

他人材木になるな

他人の態を見て我態を直せ

他人を禱らば穴二つ

他人に貸すとも傘を日向へ乾すな

他人を誹らずして己を慎め

他人の喜ぶを聞かば悅べ

他人の愁ふを見たら患へよ

他人の一寸己の一尺

他人の嘘は己が嘘

貧すれば鈍する

貧僧の重れ瘡

貧の一燈長者の萬燈

貧乏閑暇無し

貧乏柿の核澤山

一人娘に婿八人

一人口は食へぬが二人口は食へる

一少勝りの女房は鐵の草鞋で捜しても持て

一條の矢は折るべし十條の矢は折り難し

百病は氣から起る

百貫の抵當に綢笠一蓋

百貫の暦も放されば知れず

百聞は一見に若かず

美女は醜女の仇

美女は化粧を要せず

空腹時に無味物なし

最貫の引倒し

引越の時失つた物は出ない

膝とも談合

火を見たら火事と思へ

日暮て道遠し

尾州に明君なく紀州に賢臣無し

聖も時に適はず

も の の 部

物は言ひやうで角がたつ

物は相談

物は試し

物種は縮まれず

物しって物される

門前の小僧習はぬ經讀む

門を出れば七人の敵あり

持たが病は治らない

持た癖は直せない

餅は餅屋が巧手

餅は乞食に燒せ魚は犬名に燒せる

眞宗物知らず

元木に優る枝木無し

桃栗三年柿八年柚は九年で生りかゝる

千兩八百十三年（兩に三貫七百四十八文

相場）

千丈の堤も蟻の穴より崩れる

千里も一足より

千金の子は市に死せず

錢にある時は鬼をも使ふ

錢金は他人

錢には耳無くして聞く

錢金は涌き物

小の虫を殺して大の虫を助ける

小便一町飯一里（時間）

小敵と見て侮るな

小敵の堅きは大敵の擒

善は急げ

善立て名流れ寵極めて禍多し

せ

善を積む家には餘慶あり
世間に人鬼は無い
世間知らずの高枕
寄に腹は替へられない
寄中に眠は無い
急ては事を仕損じる
船頭多くて船を山へ行る
性は道によつて賢し
栴檀は二葉より知れる
責る馬には禮義無し
生あるものは死あり
前車の覆へるは後車の誡め

す の 部

好きこそ物の巧手なれ

す

好きには身を扮す
捨る神あれば助ける神あり
据膳食はぬは男の恥
住めば都
末の百文より今五十文
粋は身を食ふ
水晶は塵を受けず
隙間から來る風は寒し

い の部

一富士二鷹三茄子

一幅一對

一かばちか試てみる

一遍こッきり

犬骨折て鷹に取られる

犬の糞で雛をとる

命の洗濯をする

命を鴻毛より輕くす

石部金吉鐵兜

薯の煮たの御存じ無い

痛し痒し

い

伊勢へ七度熊野へ三度
蟹の鮑の片思ひ
言はして捨けば放圖がない
馳の道で音沙汰が無い

ゐ の 部

坐ゐて糞をする
野猪武者

ろ の 部

六十齢の蓮破り
六十齢の手習
論語讀みの論語知らず
勞して効なし

は の 部

箸も持たぬ全燒

箸の揚げ卸しに言ふ
箸の倒れたにも靈く
鼻毛を拔かれる
鼻下の建立
島水練
花も實もある言葉
針程の事を棒程に言ふ
果から果
齒も立たない
八天狗を働く

に の 部

二足三文
二度鑢り
二の足を踏む

ば

に

二進も三進も行かぬ
人面獸心
似たり寄たり
女房が角を生やす

ほ の 部

骨折損の草臥まうけ

へ の 部

臍が茶を沸す
臍を嚙む
屁とも思はない
べろり山椒味噌

と の 部

何所を推せば其な音が出る
何所の馬の骨か知れない

時世時節
時と品による
取たか見たか
土用布子に爽雛子
老人の冷水
悅けた婆さん小桶で茶を呑む
毒と藥とちやんぽん
泥を投げてその汚を云ふを諱む

ち の 部

沈香も燒かず屁も放らず
茶に醉た態
地金を出す
竹馬の友

り の 部

臨機應變

ぬの部

るの部

をの部

小田原評議

終り初物

おの部

お乳廻日傘

お里が知れる

お鉢が廻て來る

お茶を濁す

お前百歳まで私あ九十九まで

お飾の下を餘計くゞりてゐる

親思ひの主人倒し

親の臑ッ嚙り

親の首へ繩を付る

親の雪隱ばかりへ尿をする

帶には短し襷には長し

帶には短し鱠鼻糊には長し

己の田へ水を引く

己の事は棚へ揚ておく

御田百姓作り取り

親船に乘つた氣でゐる

鬼の留守に洗濯をする

老込の學問

大目て見ておく

恩を讐でかへす

わの部

おわ

かの部

肩で風を切て歩く
肩で息をする
金が云はせる旦那
金の生る木は持たない
金に厭目を付けない
鐵の鞋で探がす
堅唾を呑む
堪忍袋の緒が切れる
勘定合て錢足らず
隠辨慶
歸り新參
掛付け三杯

よの部

弱い者いぢめ
宵っ張りの朝寢坊
宵越しの金は遣はない
横の者を縱にもしない
讀ん同士書ん同士
慾に目なし
外目で見た程よくは無い

たの部

寶の持腐れ
寶の山に入りながら手を空くす
大事の前の小事
大丈夫鐵の脇差
高みの見物
高くとまる

よの部

たれりつ

立ばを失ふ
立消えになる
他人雑じへぬ水入らず
他人行義
玉に瑕瑾
欺しでも透しても
默てゐれば放圖が無い

れ の 部

ろ の 部

そっと申せばがつと申す

つ の 部

使先きて油を賣で歩ぐ
使先きで足駄を穿く
月と鼈の違

唾も引掛けてが無い
爪の垢ほど（少量）

ね の 部

猫も釋子も
猫撫て聲
猫ばゞにする
子に臥して寅に起る
根を斷ちて葉を枯す

な の 部

七重の膝を八重に折る
長がし短かし
梨も礫も無い
泣ても笑つても
何喰はぬ顔

らむう

らの部

むの部

向ふ三軒兩隣家
昔時と ッた杵柄
六日の菖蒲十日の菊

うの部

嘘から出た眞言
嘘八百
嘘の万八
鵜の目鷹の目
鴛鴦かせたこともある
獨活の大木
牛を馬に乘替る
怨を恩でかへす

憂身を扮ず
自家を外にする
臙だとも潰れたとも云はない
海の物とも山の物ともつかない
雲泥萬里の違ひ
海に千年川に千年
運賦天賦

のの部

乘り掛つた船
乘るかそるかやつてみる

くの部

口も八町手も八町
口車に載せる
口に土用が這入てゐる中は靜なり

のく

く の部

食はず嫌ひ
薬にする程も無い
暗闇の頬冠り
藪も味噌も一所
草を分て探す
腐れ縁
雲を掴むやうな探しごと
苦界十年

や の部

鎗が降つても構はない
鎗先きの功名
矢も楯もたまらず
破れかぶれ
遣らずぶつたくり

ま の部

万能ありて一心足らず
前へ二々歩後へ三歩
繼子扱ひ
隨意よ三度笠横ちよに冠る

け の部

喧嘩過ての棒千切
喧嘩同士の軒並び
怪我の功名
敵して遠ざける
けんもほろゝの挨拶

ふ の部

福徳の三年目
豕の木登り

ふど

振向て見も仕ない
二回返辭で來る
蟒蜉の一期（短きを云ふ）

どの部

五兩で帶を買で三兩でくける
五斗米に腰を屈める
小娘のかんきん老人の夜歩き
小坊主に天狗八人
權兵衞太郎兵衞（差引等しきこと）
權兵衞が種蒔きア鴉が穿ぐる
小供の喧嘩に親が出る
轟んでも唯起きない
炬燵辨慶
詔陽魚の齒ぎしり

午蕚程な尾を振て來る
言語道斷
虎口を逃れて龍穴に入る
此所ばかり日は照らない
心二ツに身は一ツ

ねの部

得手に帆を揚げ
得たりかしこし
樂燿に饅頭の皮を剝く
江月ッ子のちやきく
緣の下の力持

ゐの部

猿猴の水の月

ての部

てあ

手持ち不沙汰

手生けの花（身受けした女を云ふ）

手を濡さずに取る

亭主を尻に敷く

亭主の貌へ泥を塗る

手取りばい取り

提灯で餅を搗く

てび編笠（赤貧のこと）

てんやわんや

あの部

足駄をはいて首ッたけ

足元の明るい中

足元へも追付かない

足元を見て付込る

あ

後の雁が先きになる

後の祭禮（間に合はないこと）

後は野となれ山となれ

可惜口へ風を入れる

可惜花を散す

天窓隱して臀隱さず

天窓の黑い鼠

朝題目に夕念佛

朝飯前の仕事（容易なること）

相手替れど主替らず

相手欲しや

彼でも無い斯うでも無い

彼云へば斯云ふ

當らずと雖も遠からず

當つて碎けろ
虻も捕らず蜂も捕らず
過ちの功名
願を外しで笑ふ
餡を喰はせる（勝負事で故意と負ること）

さの部

三年の古疵を探る
三遍廻つて煙草にしよ
三名騒がし
左様は問屋が卸さない
左様然らばの挨拶
酒屋へ三里豆腐屋へ二里
咲た櫻に何故駒繋ぐ

雑喉の魚交り
鷺を烏と云ふ
猿の人眞似
沙汰のかぎり

さの部

切て接木をする
切ても切られぬ中
兄弟墻に鬩ぐ
京の夢大阪の夢
氣の利た化物は引込む時分
九死を出て一生を得る

ゆの部

往掛けの駄賃
弓と弦の違ひ

めの部

目を皿のやうにする

目と鼻の間（里程の近きこと）

目八分に持つ

盲人の牆覗き

みの部

水の泡となる

水掛論

水も漏さぬ中

水に流して仕舞ふ（斷念すること）

三歳子に淺瀬を教はる

三日坊主

三ツ鼎で話す

身から出た錆

身も蓋も無し

身で身を喰ふ

見付られたお百年目

木乃伊取りが木乃伊になる

しの部

尻に帆掛る

尻食ひ觀音

尻の穴の毛まで拔く

尻口で物を言ふ

蛙が出さうで蚊も出ない

蛇の鮓でも食ひさう

下ツ腹に毛が無い

下地は好きなり御意はよし

師走浪人冬編笠

し

獅子の子育て
十把一ッからげ
悲慈をすれば糞をする
證文の出し遲れ
四國猿
信州のむく鳥
猪食た報ひ
借金を質におく
舌を二枚に使ふ
死もの狂ひ
敷居が高くなる
尊柴のやうな筋を出す
杪子定規
正月が三ッ一緡いたら

ひ

ひの部

一ッ鍋の物を食ふ
一條繩ではゆかぬ
一ッ穴の貉
一口物で頰を燒く
一言いへば二言返す
百文一升でお斷り
百姓の万能
百も承知二百も合點
引かれ者の小唄
引ッぱり凧にされる
庇を貸して母家を取られる
他人の疝氣を頭痛に病む
左り團扇で生活す

もせす

も の部

元のもく阿彌

もつけの幸

物を餅に搗く

せ の部

千慮の一失

節季の感冒は買てもひけ

す の部

酸も甘いも承知

壓に斑持つ

する事爲すこと鵲の嘴

い の部

石橋を叩て渡るやう

石に印を捺すやう（確實なること）

石が浮て木葉が沈むやう

石を抱て淵に臨むやう

市に虎を放つやう

市に禍を買ふやう

市の中の隱居のやう

一を聽て十を知るやう

一文錢にて生爪をはがすやう

犬の川端歩きのやう

犬猿の仲のやう（不和）

ねるろは

醫者も匙を投るやう

岩に花咲くやう

煎豆に花が咲くやう

生馬の目を抜くやう

芋を洗ふやう（雑踏の態）

砂中の黄金のやう

るの部

居ても立ても居られぬやう

井傍に兒を置くやう

るの部

はの部

灰吹から蜷が出るやう

灰の中を歩くやう（ほこりの道路）

灰吹（載せた）鶴子のやう

針で地を刺すやう

針の蓆へ坐るやう

鼻を摘んで逃出すやう

鼻を摘まるやう（闇夜）

走り馬が糞を垂るやう

走る馬に鞭つやう

齒痒いやう

齒が浮くやう

畠に蛤を求るやう

箸にも棒にも掛らぬやう

掃溜へ鶴が下りたやう

鉢坊主が米をこぼしたやう

鳩が豆鐵炮をくらつたやう（虚面）

腹の皮がふれるやう（抱腹）

はに

蠅が燈心を使ふやう（頭腦）

羽が生えて飛ぶやう（こわい眼）

剣で押したやう（腫物）

腫物へ觸るやう（多數）

簾ではくやう（多數）

にの部

上階から目藥をさすやう

二階から臀を焙るやう

貧でも燒でも食べないやう

人參呑て首をくゝるやう

錦を着て夜行するやう

西の國で百萬石も領でゐるやう

餓盲人の杖失ひのやう

苦虫を喰潰したやう（容貌）

ほの部

佛造つて魂入れぬやう（無用）

佛頼んで地獄へ落るやう

盆と正月が一所に來たやう（繁忙）

枠を呑だやう（立すくまり）

牡丹餅で頬を敲かれるやう（幸の幸）

頬が落るやう（美味）

骨が無ければ一體になりたいやう（戀情）

細い煙りも立ちかねるやう（貧窶）

への部

瓢簞で鯰を押へるやう

瓢箪を括たやう（帶をかたく締めた態）

ほへ

へと

瓢箪から駒が出るやう

蛇の生殺しのやう

屏風を倒すやう

とのの部

虎の威を借る狐のやう（威權）

虎を竹藪へ放すやう

虎の子のやう（秘藏物）

鳶に油揚を攫はれたやう（虛貌）

鳶の巣立ちのやう（拙手な笛聲）

鳶が鷹を生だやう（醜婦が美貌の子を産んだこと）

飛鳥も落るやう（強き威權）

飛び立つやう（喜悅）

土佛の水遊びのやう

燈心で竹の子を堀るやう

冬瓜船が着たやう（坊主の集り）

德利の身投のやう

鳥無き鄕の蝙蝠のやう

豆腐に鹽のやう

酉の市の賣殘りのやう（三平二滿）

何所を風が吹くかと云ふやう

土用見舞の道明寺の袋のやう（肥滿）

ちの部

矯狗が嚏をしたやう（容貌）

矯狗の貌々揚を任たやう（容貌）

地獄で佛に逢つたやう

茶碗と茶碗のやう

重箱の隅を搗枝で洗ふやう

ちりぬ

女郎の腐たやう（遊廓）

豊三買でつりを取るやう

血で血を洗ふやう

智恵の無い子に智恵を付るやう

定規で押したやう（答弁）

り の 部

両手に花を持つやう（遊廓）

癩病やみの小便のやう

綸言汗の如し（天子の言葉）

ぬ の 部

盗人を見て縄をなふやう

盗人に鍋を渡すやう

盗人に貫錢のやう（泥土の事）

濡れ鼠のやう

濡手で粟を掴むやう

糠に釘のやう

糠味噌が腐るやう（拙手な浄瑠理の聲）

る の 部

を の 部

女の腐たやう

お の 部

鬼の念佛のやう（当日の祈願の容顔）

鬼の首でも取たやう

鬼に鐵棒のやう

鬼の起證みるやう（夜間の暗室）

鬼の金齒のやう（上白米の飯）

鬼の霍亂のやう

鬼が十能を抱へたやう

る を お

おわ

手遊箱を引繰反したやう

手遊の竈のやう（鼻吼の仰向いたさま）

重荷を卸したやう

狼が衣を着たやう（外面如菩薩内心如夜叉）

奥歯へ物が挟まつたやう

お平の長芋のやう（色白て無愛嬌の容貌）

三平二滿が甘酒に酔たやう

お亀が甘酒に酔たやう

大風の後のやう

寤寐が湯治に行くやう

親船に乗て犬子に吠られるやう

負ふた子を人に尋れるやう

わの部

渡りに船を得たるやう

破鐘のやう（大なる故聲）

脇下から冷汗が出るやう（冷汗）

笑て損したやうな

綿に針を包むやう

かの部

河童に臀子玉を抜れたやう

河童の川流れのやう

河童の寒稽古のやう

河童の屁のやう

河向ふの喧嘩のやう

河向ふの火事のやう

鐵槌の川流れのやう（恐怖低頭の体）

鐵釘の折れのやう（拙手の楷書）

か

噛て吐出したやう（醜顔）

噛て含めるやう（怨なる言聽かせ）

蛙の面へ水のやう

蛙の頬冠りのやう（前後思慮なき躰）

風吹き烏のやう

風上にも置けぬやう（嫌はしき物）

飼犬に手を噛まるやう

栗が蹴をしたやう（シヤクんだ貌）

壁に馬を乘掛るやう

鉋屑へ火が附たやう（早言）

南瓜に目鼻を付たやう

貌から火が出るやう（赤面の躰）

鉦と太鼓で探すやう（罕なる物）

枯木に花のやう

烏の行水のやう（無効）

鏡磨が水銀を出すやう

蚊の嘴のやう（痩たる手足）

片腕をもがれたやう

肩身が狭くなるやう

鼎の沸くやう（騒蕩）

匙で頭痛を病むやう（手端）

癩病の向嘴のやう（肌の光るを云ふ）

蟹のすゑのやう（不和）

籠の鳥のやう（究屈）

洋い所へ手が屆くやう

立て膝の部

良の管から天上を視くやう（臆病）

新婦の涙程（少量）

よれ

よいの〻が水溜を見たやう（締り無く笑ふ体）

れの〻部

立て板に水を流すやう（能辯）

大木へ蟬がとまつたやう

棚から落た牡丹餅のやう（僥倖）

鷄卵へ目鼻を付たやう

炭團へ目鼻を付たやう（水らさ）

唐人の寐言のやう（解らない話）

立ち臼へ蒲を卷たやう（肥満）

玉の巵に底無きやう

濃む木の元に雨滴るやう

薪を抱て火を救ふやう

れの〻部

れん木で腹を切るやう

ろつね

ろの〻部

ろつの〻部

爪で火を燈すやう（吝嗇）

爪で拾て箕でこぼすやう

爪も立たぬやう（雜躁）

釣鍾から脚を出したやう

春屋の日待のやう（腕力の遊戯）

ねの〻部

猫に紙袋を冠せたやう

猫に小判のやう（無味不解）

猫に鰹節のやう

猫に天木蓼のやう

猫に逢た鼠のやう

猫の尻へさい槌のやう

ねならむ

猫の尻尾のやう（無益物）
猫の額のやう（狹隘）
猫の子を貰つたやう（支度なき婿嫁）
鼠耳に水のやう（思ひ圖らざる事）

な の 部

流川で臀を洗たやう
生木を割くやう（戀慕の男女を別つ）

む の 部

虫が這ふやう（遲々たる歩行）
虫も殺さぬやうな（篤實の躰）
虫の息のやう（瀕死）
虫酸が走るやう
胸が張裂るやう（悲歎）

う の 部

馬を得て鞍を失ふやう
馬の耳に念佛のやう
馬の耳に東風のやう
馬の小便のやう（炎出したる茶）
瓜を二つに割たやう（相肖たる貌）
瓜の核を並べたやう（白き細かき齒）
牛にも馬にも蹈まれぬやう
牛の角に蜂のやう
鰐の眞似をする烏のやう
薄紙を剝すやう（病癒の快方）
兎の毛で突たほど（小き傷）
梅と櫻を兩手に持つやう
自家には金の茶釜があるやう

ものく

内から火事を出すやう

のの部

蚤の夫婦のやう（小さい物）

蚤の睾丸のやう（小さい物）

蚤の頭を斧で割るやう

咽喉がゲヒ〳〵するやや

くの部

暗闇から牛を牽出すやう（暗闇から明るみへ出すやう）

暗闇の恥を明るみへ出すやう（暗闇へ鐵炮を發すやう）

口が逃てゆくやう（食急ぎ）

口から先きへ生れたやう（多辯）

口が曲るやう（鹹味）

口が酸ばくなる程（數百）

光陰流水の如し

光陰矢の如し（歲月の速かなる）

蜘の子を散したやう

栗虫のやう（肥滿の体）

草を打て蛇に驚くやう

櫛の齒を引くやう（屢の使者）

靴を隔て痒きを掻くやう

黑山のやう（人の群集）

糞船のたわしのやう（男の大髭）

首を回らいなやう（借錢多き樣）

雲を突くやう（長高き追剝盜人）

蝸牛の角爭ひのやう

功德は大海の如し

禍福は糾へる繩の如し

や の部

藪を突て蛇を出すやう
藪から棒が出るやう
藪に馬鍬のやう
山に蛤を求むるやう
山師の玄關のやう
庸醫者の玄關のやう
庸醫者が靈蜆ごうろうを拾つたやう
闇に礫のやう
闇夜に提灯を得たやう
燒場に銅壺を曳擔るやう（惡聲の放歌）
燒石に水のやう
屋臺見世の蟹のやう（兩肱を張つて威張る体）

矢を突くやう（迅速）
鎗持の雪隱のやう（細く高い家を云ふ）
藥鑵で湯てた鯰のやう
痩馬に重荷のやう

ま の部

林香賛た閻魔のやう
眉毛に火が付くやう（火急）
皿盆の目鼻を付けたやう
眞綿で首を締るやう
枕草紙の殿樣のやう（白博多の狹み帶を締めたる体）
豆を煮て糞を燒くやう
万年も馴んだ子狗のやう
盲龜の浮木に逢たやう

ひふ

けの部

毛を吹て疵を求むるやう

下駄に燒味噌のやう（効き目の無いこと）

献上の鴨のやう（足袋ばかり白く新しき

を穿きたる体）

ふの部

袋の中の鼠のやう

風前の燈火のやう

蹈んだり蹴たりされるやう

吹けば飛ぶやう（軽き身分）

二タ目と見られぬやう（醜顔）

家を盗んで骨を施すやう

符節を合はせるやう

この部

箏柱に膠するやう

古木を移して枯を導くやう

米搗臼蛋が禮に來たやう

木葉を嚙むやう（無味の物）

蹋蕷の幽靈のやう

五十歩逃げて百歩を嗤ふやう

小刀に鍔のやう

粉屋の盗賊のやう（粉装の体）

肥取りに握り屁を嗅がせたやう（臭の甚）

胡椒の丸呑みのやう

麺町の井戸へ鮑貝を投込んだやう（歪み

たる眼）

この部

閻魔が鹽辛を嘗たやう

江戸の鬜が長崎で打つやう
海老で鯛を釣たやう

あの部

盡にかいた餅のやう（絶景）
盡にかいたやう（戯態及白痴の躰）
盡にもかゝれぬやう
盡にかいた地震のやう
穐元から水を掛けられるやう

ての部

掌の裏をかへすやう（聰化の迅速）
掌にとろやう（能く聽き得る者）
掌に汗を握るやう
掌中の玉を取られたやう
手も付けられないやう

手放しのやッカツコウのやう
手習は坂に車を押すやう（極難事）
手足が抜けてゆくやう（草臥たる躰）
天道へ唾を放掛けるやう
天道へ石を放げるやう
天井が紙臭いと云ふやう
提灯に釣鐘のやう
泥中の蓮のやう（泰然）

あの部

足元から鳥が立つやう（火急）
足が楢木になるやう（多く奔走の躰）
蠶が文庫を背負たやう
蠶の脚絆のやう（短き物）
荒い風にも當てぬやう

荒布のやう（敝衣）

開た口へ牡丹餅のやう

餡こぼる餅で屁を叩かれるやう

青菜に鹽のやう

煩て蠅を追ふやう（腎虚）

愛嬌が溢れるやう

油紙へ火が付たやう（多辯）

網の目から手が出るやう

亦ン坊の腕をねぢるやう

秋の木の葉の散るやう

蟬の觀音詣りのやう

呆れが禮に來るやう

穴があれば這入りたいやう（面目なき体）

切店の惠比壽へお供をあげたやう

雨霰の如く（矢彈の烈しき体）

鶯が繪を蹈むやう（筆不勢）

鷺を烏と云ふやう

座頭の中坐敷のやう

座頭に煮湯を呑ますやう

竿の先きへ鈴を付たやう

笹ッ葉へ火の付たやう（多辯）

猿が梢を渡るやう（無登山の輩）

霜下の花のやう

三年の戀もきめるやう

逆蜻蛉のやう（平身低頭の体）

砂糖屋の前を馳て通つたやう（羨者）

酒を買て腎を切られるやう

さき

材木屋の鳶のやう

き の 部

木から落た猿のやう（親族無き獨者）

木に竹を接ぐやう

木に餅が生るやう

木で花をくくつたやう（無愛相の躰）

木に絲で魚を求めるやう

狂人に刄物を渡すやう

狂人の跨倉へ蜂が這入たやう

狐を馬へ載せたやう（信用の出來ぬ事）

清水の舞臺から飛下りたやう

雖を立てる地も無いやう（群集雜踏）

金時が火事見舞にきたやう（酩酊の躰）

ゆ の 部

湯水のやう（金錢の大浪費）

湯出鐘のやう（酩酊の躰）

雪と炭のやう

夢に牡丹餅のやう

め の 部

目から鼻へ抜るやう（怜悧敏銳）

目から火が出るやう（天窓を強く打ッた時の心地）

目の上の瘤のやう

目も當てられないやう

目を取ッて鼻へ付けるやう

目糞が鼻糞を嗤ふやう

盲人が杖を失したやう（無慘或は慾むべき躰）

ゆ め

め部

盲人に杖を貸すやう

盲人に目鏡を貸すやう（無駄な物）

飯の上の蠅のやう（うるさき物）

み の 部

（耳を押へて鈴を盗むやう

耳に膿が出来るやう（聾聽く）

耳を取て鼻へ付るやう

耳がとんぼかふるやう

耳搔て集めて熊手で搔出すやう

身の毛がなだつやう（恐怖の体）

身も世もあられぬやう

身を切られるやう（不面目の体）

蚯蚓のぬたくったやう

し（の部）メ部

蜆貝で井戸浚をするやう

蜆が上下を着たやう

白い齒は見せられないやう

白魚を並べたやう（色白く細き指）

死だ子の年齡を算へるやう

車軸を流すやう（大雨）

釋迦に說法のやう

下へも置かないやう（世辭澤山）

蜻蛉が蚊を呑だやう

將棋倒しのやう

醬油で煮じめたやう（垢染たる手拭又褌）

將棋は早馬の如く碁は牛の如し

尻切蜻蛉のやう（尺づまりの羽織を着た体）

尻の穴から煙が出る程

ひの部

火打箱で燒味噌のやう

火打箱のやう（狹隘なる家）

火水の鬪ひのやう

火が降るやう（赤貧の体）

火の車のやう（貧家の体）

火が消えたやう

比丘尼の髮を結ふやう

比丘尼に櫛をさしゝぜるやう

日合から日蝕を拜むやう（眇眼）

日陰の桃の木のやう

百日の說法を尾一放にするやう

百文で買た馬のやう

鹿角菜の行列のやう（拙手な草書文）

平蜘のやう（平身低頭の体）

廣島藥鑵の口をもいだやう

人の一生は車荷を負て遠道を行くが如し

硝子を倒さに釣したやう（絶美の貌）

もの部

燃る火に薪をくべるやう

燃る火に油を灌ぐやう

燃出るやう（緋縮緬などの色）

木魚が質に措れたやう（褥上安居の体）

せの部

雪隱で鎗を使ふやう

錢を嚙むやう（高價の食物）（吝嗇）

千日に刈た茅を燒くやう

せず

煎餅のやう（濡き布團）

長競べなら横で來いと云ふやう（肥滿）

す の部

櫓木の穴へ糸を通すやう

櫓木に羽が生えるやう（蒸土瓶の蓋）

櫓本で重箱を洗ふやう（泥龜が時を告るやう）

鮓を壓付たやう（蒸土瓶の蓋）

酸でも蒟蒻でも食へぬやう

水風呂桶で午蒡を洗ふやう（蒸土瓶の蓋）

砂を絞つて油をとるやう（蒸土瓶の蓋）

い の部

從弟同士は鴨の味

石飛てその碁に勝

羽魚の不漁な年は季候が悪

池袋村の女に姦通ると妖怪が出る

犬を屋根へ載せると火に祟る

犬を叱る張棒で打つと棒が折れる

鼎が道を横切たら石を投げぬと魅される

銀杏の木は化る

戌刻前の丁子は油皿へ入れると禍が來る

蟲を食はせると子供の虫の薬になる

る の部

はろは

守宮の黒焼を振掛ると人が戀慕ふ

守宮の血を女の腋へ塗れば腋臭淫ずれば

[illegible]

井戸を埋ると災がある

[illegible]

ろの部

[illegible]が燈油を嘗る

はの部

鼻の穴へ暗闇で物を食ふと長者になる

鼻の穴の大きな者は金遣があらい

鼻の下の長い者は長命をする

箸を手渡しすると仲が悪くなる

箸で飯茶椀を叩くと餓鬼が來る

箸が折れると縁起が悪い

箸先きにねると白痴になる

箸を逆に立てると客が歸る

箸で打たれると三年生きない

初物を食ふと七十五日生延る

初王手目の藥（將棋の語）

蛤は蠱氣櫻を吹く

蛤は子供に虫の毒

箱根から以東に妖怪はない

流行目は白眼でおく

傳染らない

酒を越えると食物の鹽氣が減る

齒糞は蜂に刺された良藥になる

早飯早糞早走りは藝の中

話が下掛になれば終ひになる

針を足の裏へ刺すと頭上へ昇る

袴の紐を結んでおくと出世仕ない

はにほ

孕女が火事を見て體を掻くと子に痕がでる

にの部

二十一波錢で腰卷を買ふと下の病を煩はない

二度あつた事は三度ある

胡瓜の好な者は多情

面皰は渴婢の兆

ほの部

杜鵑は八千八聲鳴くと血を吐て死ぬ

杜鵑の初音を鏡に向て聞けば狹あり

杜鵑の初音を厠で聞けば禍あり

杜鵑の初音を芋畑で聞けば福あり

顏の赤い婦人は陰門が臭い

へ

への部

布袋竹の杖をつくとよいくになる

蛇へ指じをすると指が腐る

蛇の太さ長さを指で眞似たら吹て置かな

いと腐る

蛇の穴へ女が小便すると見込まれる

蛇は拔けると天上する

屁の色は黃色い

臍の垢をとると力が失なる

瓢簞を持てゐると轉ばない

竈の上へ刃物を載ると怪我をする

とのの部

鳥影がさすと客が來る

酉の市が三度ある年は吉原が火災

ぼぺと

杼栗を食ふと吃になる

砥石を跨ぐと割れる

蜥蜴へ指しをすると指が腐る

鰌を椽下へ入れると火に祟る

老人の子は影なし

豆腐の穀を溢さず食ふと長者になる

ちの部

茶初穂を呑むと憎まれる

茶を呑むと色が黒くなる

茶を呑むと年がよる

地下で大鯰が動くと地震がゆる

地震の時刻に縁て晴雨が知れる

近星が顯ると悪事がある

縮び髪の女は情味がいと

後頭毛を三本抜くと鼻血がとまる

りの部

嫉妬婦には角が生える

ぬの部

塗物へ貌を映すと幼貌が失せない

るの部

留守に影膳を据ゑると腹が空らない

をの部

女子に男の名男子に女の名を付ると健康に長つ

女が双栗を食ふと二子を生む

女が釣鐘の下へ這入ると蛇になる

女が雞卵の殻を蹈むと白血になる

女が細帯を締てゐると臀が大くなる

女が袋を裂らずに捨ろと袋ッ子を産む
女の鼻血は夢に見ても宜い

お の 部

大物を出すと雨が降る
大男に大物なし小男に小物なし
大火事の前には白い鳥が飛ぶ
帶を結で仕舞置くと出世しない
帶を卷て仕舞置くと苦勞が絶えない
帶を締ろ時結ばつたら他人に解て貰へ
親に似ぬ子は鬼ッ子
親を白眼むと平目になる
母指を嚙で寢ると寃れない
飯桶拂ひの飯を食ふと出世しない

わ の 部

脇の下が吸ぐと腋臭が出る
脇の下で音をさせると腋臭が出る

か の 部

烏の眞似をすると口端へ燕脂を据られる
烏は三年米來を悟る
烏に糞を放掛けられると運がよくなる
柿の木を植ると三年生きない
柿の米を薪にすると火に祟る
柿の核を蒔くと其木へ實の生る年に死ぬ
蛙に煙草の脂を昔させると腸を吐て洗ふ
蛙を箱へ入れて揺ぐと消失る
蛙の脂で火を燈じて見ると人の貌が長く見える
香物の嫌ひな者は貧乏する

香物をつなげば切る女は嫉妬深い

香物の食掛を食ふと仲が悪くなる

肩を押れると長が伸びない

肩を冷すと感冒をひく

雷は臍を取る

雷が割た木は雷除になる

釜中燈油を溢すと火に祟る

拝所へ手を屆かす人は親孝行

河童が腎子玉を抜くと死

影を食はれると疲る

床中の夜に交合をすると盗賊の子が生る

考へ出し笑をする者は多淫だ

片口から水を呑むと三ッ口になる

燈籠に唾付れると雷が鳴なければ放さぬ

織機を附けながら子に乳を呑すと河童に引れる

髪を結て抜た元結の輪を出かけると死ぬ

よ の部

夜耳の穴を掘ると貧乏する

夜耳の穴が痒いと翌日貢物がある

夜爪をとると親の目に置入る

夜口笛(又鬼灯)を吹くと蛇が出る

夜家内を箒くと貧乏する

夜豆を喰ふと健康になる

夜ひめ粘を賣ると火に祟る

夜鶏の啼眞似をすると火に祟る

夜出た蜘は親とみても殺さぬと悪い

よた

然りの無い者は口が臭い

横禿は敲で嗅ぐと新澤菴の味がする

厭惡冒をひく者は健康だ

四目十目の男女は飽がくる

たぬきの部

狸が腹鼓を叩く

狸の睾丸八畳敷

狸が大人道や小間に化ける

唐茄子を食ふと口が臭く

澤菴の香物を茶へ入れて食ふと

なる

足袋を穿て寢ると親の死目に合はない

襷を掛けて飯を食ふと襷が三杯食ふ

竹へ實が生ると饑饉がある

れ

立ち聞きをすると三尺地下の虫が死ぬ

れの部

つの部

算盤で錠が開く

つの部

月の中に兎が居る

月光で針穴を通すと目性がよくなる

月から水がとれる

月夜に取た蟹は肉が少ない

月夜に取た鰕は身が小さい

爪を火にくべると狂人になる

爪に白斑が出來ると衣服が新調る

爪の短かい者は器用だ

爪を噛み食をすると死が出る

うねね

旋毛が(天窓の)片寄った人は根情がわるい

旋風の中には鯉鮒が居る

鶴は千年亀は万年生きる

使掛けの楊枝を使ふと仲が悪くなる

ねの部

猫を殺すと七代祟る

猫が顔を洗ッを足先が耳を越すと雨降る

猫は髭のあるので暗闇が見えるぶさ

鼠は天黒天の召使

鼠に翼が生えて蝙蝠になる

鼠ろ子は生長〉

なの部

蜷蚰を呑むと腔が美くなる

蜷蚰を乾固めると刀の目釘になる

茄子の食掛を食ふと仲が悪くなる

茄子のへたの心を食ふと長命をする

夏は熱い物が腹の薬

夏胡瓜を川に流すと河童に引かれない

泣く子は生長

生味噌を食ふと貧乏する

梨の水が付た刃物で手を切ると治らぬ

らの部

來年の事を言ふと鬼が笑ふ

雷獣は雲へ乗る

むの部

虫歯を焼くと虫がとれる

虫が怒ると子供が泣く

麥粉菓子を壁へこぼすと蚕になる

麥粉菓子をこぼさずに食ふと長者になる

うの部

丑の日に饅を食ふと良藥になる

丑の日に買た紅は藥になる

丑の時には草木も眠る

魚の目を食ふと石砲が出來る

馬の糞を知らずに踏むと長が高くなる

移り紙を懐中へ入ると盜人になる

梅干の食掛を食ふと仲が惡くなる

内肥は蚊に食はれても惡い

打出の小槌隠笠隠蓑がある

嘘を吐くと閻魔に舌を拔かれる

のの部

殘り物には福がある

粘飯を食ふと出世仕ない

くの部

櫛を貰ふと仲が惡くなる

櫛を拾ふと苦が絶えない

櫛を落すと苦が消える

口の大きな人は福がある

口笛を吹くと貧乏する

鳥芋を食ふと水氣が減る

唇の薄い者は多言だ

くすぐッたがらない者は奸夫の子

嘔をした時肩を三ッ宛叩ておけば風を引かない

嘔を一つすれば贅られ二つすれば憎まれ三すれば惚られ四すれば風を引く

草花の殼が耳に入ると聾になる
苦勞性の人は頭垢が細かい

や の 部

楊枝を手渡しにすると仲が悪くなる
楊枝の使掛を使ふと仲が悪くなる
楊枝は折て捨てないと化る
夜食に若し夷膳を据ゑたら直すと悪い
壁虎が食付くと雷が鳴らぬうちは放さぬ
山の諸が饅になる

ま の 部

蝦指の者に灸をすゑられると熱い
蝦指で抑へると癪が治る
間違へて吹竹を逆に吹くと客が來る
間違へて鐵瓶の後をつぐと坊主客が來る

升の底を叩くと鬼が來る
前齒の離れてゐる者は親不孝
薪が吹くのは荒神が喜ぶ表
枕を投ると頭痛持になる

け の 部

下駄を洗ふと雨が降る
下駄へ灸をすゑると客が歸る
下駄を壓の上で穿くと齒が欠る
毛深い者は色深い
毛を火にくべると狂人になる
入耳虫が嘗ると跡が禿る

ふ の 部

三股茶莒を持てゐると狐に魅されない
二人で火を吹たら爺婆と云はぬと仰が悪

くなる

富士山の見える國へは美人ができぬ

鼻糞を締めないと陰莖が大きくなる

節のある楊枝を使ふと苦勞する

腓腸を揉むとよいくになる

葡萄を植ると病人が絶えない

蜻蛉は一時の壽命

と の部

蒟蒻を食ふと腹中の砂を拂ふ

蒟蒻は子供に虫の毒

子供の枕元へ犬張子を置くと能く生長つ

子供は風の子だから寒がらないものだ

赤飯へ茶を掛て食ふと婚禮の時雨が降る

焦飯の好きな者は麻臉面の人と連添ふ

根情の惡い者が擂ると芥が利く

小指の爪を延すと覺がよくなる

紙より巧手による者は良妻をもつ

米を粗末にすると眼が惡くなる

鯉の瀧昇りを見ると運がよくなる

ね の部

戎膳で飯を食ふと惡い

襟元に黑痣が出來ると衣服が新調る

な の部

越後出生の者は肋骨が三本足ない

て の部

厠で天窓を掻くと指が腐る

厠で暮六時を聽くと臀へ疵が出來る

厠へ唾をすると日中があれる

厠へ入て戸を閉すに人が入ると仲が悪くなる

厠にねる時地震が揺ると運がよくなる

手の平が痒いと貰物がある

手水を掛けられると三年生きない

寺の地内で轉ぶと三年生きない

天狗が人を攫ふ

天子に父母無し

あの部

朝飯へ茶をかけて食ふと出生しない

朝坊主は縁起が善

朝右夕左（耳の痒い時善事がある）

朝飯に茶柱が立つと客が來る

朝鳶が鳴くと雨が降る

天窓へ芥を付てねると三百文損する

天窓の大きな人は福人

足の裏が痒いと恥をかく

足の人示指が長い人は親より立身する

明日の事を言ふと天井で鼠が笑ふ

行燈の紙へ針をさすと貧乏する

青い物を火にくべると青くなるまで打たれる

雨が降て日があたつてねると狐が嫁入をする

蟻を食ふと力が出る

蛾を杖に突くと中氣しない

さの部

三人で蚊帳を釣ると妖怪が出る

さゆ

三人並んで小便すると猫が化ける
三度目の神は正直
猿は人間より三本毛が足りない
笊を冠ると長が伸びない
雑巾で貌を拭くと愛嬌が出る

き の部

狐と鼬は人の眉毛を算へる
甲子の日に雨が降ると六十日間降續く
木の實を手玉にとると翌年生らない
刃物は雷除けになる

ゆ の部

夢は獏が食ふ
夢は逆夢
指環をはめてゐると肩がはらない

ゆめ

指ぬきの穴を虫にくゝられるゝと指が腫る
夕刻に子共が騒ぐ時は翌日雨が降る
夕刻隠ン坊をすると隠坐頭が出る
雪は犬の伯母さん
柚の木の棒で打たれると三年生きない
湯に入る時肩から濡すと感冒をひかない

め の部

飯の食たてに寝ると牛になる
飯の食たてに伸をすると脇下へ食が入る
飯へ多く茶を掛るを好な者は實意がない
飯の腐たのは食ても中毒ない
目尾の下つた者は多淫
目の縁の黒い者は多淫
雌雞を神佛へ納めると雄雞になる

雌雞うたへば家亡ぶ

みの部

耳朶の大きな人は運がいゝ

耳の垢を蓄ておくと虻になる

三ツ角銀杏を持てゐると狐に魅されぬ

三豎角で飯を食ふと出世仕ない

蚯蚓に小便を放かけると陰莖が腫れる

味噌汁を呑むと煙草のやにを拂ふ

晦日に蕎麥を食ふと小遣錢に困らない

水は三尺流るれば清くなる

しの部

四十二歳の二歳子は捨てないと親を食ふ

四十九日まで魂が家の棟にゐる

七月七日に七夕が出逢ふ

舌の長い者は盗人

蜆を川へ放すと痰が治る

死だと思はれた者は長命をする

虱を火に掛けてくべると殖る

尺蠖に頭から足まで尺を計れると死ぬ

鹽で洗ふと何なる汚物も清くなる

鹹ちき物の好きな人は腎張

ひの部

人の圍を廻ると蛇になる

人の目眞似をすると天のじやくになる

人の胸を打つと三年生きない

人に唾を放かけると瘡が出來る

火いたづらをすると癈小便をする

火鉢の灰を濡すと病人が絶えない

火のじようを落すと貧乏する
火を巧手におこす者は世帯持がいゝ
枇杷の棒で打たれると三年生きない
枇杷を植ると貧乏する
一ツ星を見付ると長者になる
一重まぶちの人は美人
畳生るゝ子は父に似る夜生るゝ子は母に

肖る

雲貌の花をとると雨が降る
額の廣い者は運がいゝ
額に疵のある女は目上の者を殺す
左利きの者は器用なり
柄杓で水を呑むと柄杓のやうな子が生る
膝に黐痣のある者は旅をする

貧乏揺りをすると貧乏する
彼岸の中日に釣た沙魚を食ふと中氣せぬ
鹿角菜は毛拂になる
他人の坐た跡へ坐る時三度叩かぬと悪い

もの部

元結を跨ぐと断易くなる
尺度を手渡しにすると仲が悪くなる
餅を搗た日に燒くと火に祟る
桃の虫は眼の薬になる

せ の 部

膳へ小皿をふせて飯を食ふと貧乏する
石生の露は目の薬になる
聖人に夢無し

す の 部

水晶の丸げ寃除になる
水天宮の緣日には雨が降る
硯を洗ふと手が上達ない
硯へ文字を書くと手が上達ない
墨を逆さに摺ると雨が降る
賺屁を放た者の舌は黄色い
摺鉢の尻を洗ふと姑が早く死ぬ
濟だ事を言ふと鼠が嘘ふ
雀が海に入て蛤になる

一語千金　俚諺類集　大尾

明治卅九年七月一日印刷
明治卅九年七月三日發行

著作者　岡本經朝　東京市芝區明舟町八番地
發行者　直江外治郎　東京市日本橋區下槇町十六番地
印刷者　野村鈴助　東京市京橋區出雲町一番地
發行者　三島宇一郎　東京市神田區表神保町二番地
印刷所　弘文堂　東京市神田區表神保町二番地
發行所　文星堂書店　東京市日本橋區下槇町十六番地
發行所　新橋堂書店　東京市京橋區出雲町一番地

不許複製

德富蘆花原著
田邊龍章註釋

英譯不如歸註釋

定價郵稅共金卅五錢

尾崎蜜藏著

通俗家庭養雞法

定價金四十錢
郵稅金六錢

天野試齋著

朝鮮渡航案内

定價金二十五錢
郵稅金六錢

新橋堂發行發賣書目

村井弦齋著
增補註釋 **食道樂** 春の巻 夏の巻 秋の巻 冬の巻 合本全一冊 定價二圓 郵稅十五錢

村井弦齋著
實地經驗 **臺所重寶記** 全一冊 定價八十錢 郵稅十錢 臺灣清韓 金三十錢

宮内省大膳職 赤堀吉松 女子大學教授 赤堀峯吉 東京女學館教授 赤堀菊子共著
家庭應用 **惣菜五百種** 全一冊 定價七十五錢 郵稅十錢

久保田米僊翁選
毎日の總菜案内 全一冊 定價十錢 郵稅二錢

宮内省大膳職赤堀吉松閲 奥村繁次郎著
名物 **諸國料理** 全一冊 定價四十錢 郵稅六錢

醫學博士瀬川昌耆著 報知新聞社家庭記者 天野誠齋編
增補訂正 **實驗上の育兒** 上卷 定價六十錢 郵稅十錢 下卷 定價六十錢 郵稅十錢

十大醫學博士

家庭衞生談

狩野病院長狩野謙吾著

全一冊　定價二十五錢　郵稅四錢

神經衰弱の豫防法

工學士若目田華津著

全一冊　定價四十五錢　郵稅六錢

百人一首かるた必勝法

工學士若目田華津著

全一冊　定價二十五錢　郵稅四錢

神珍練習用百人一首

工學士若目田華津著

全一冊　定價十錢　郵稅二錢

百人一首かるた標準排列法一覽

工學士若目田華津新案

全一枚　定價五錢　郵稅二錢五厘

百人一首標準かるた

東京かるた會新案朝報社遊戲部發行

讀み札定價四十五錢　郵稅八錢
下の句定價四十五錢　郵稅八錢

高等商業學校テニス部著

ローンテニスの友

全一冊　定價五十錢　郵稅六錢

新橋堂編輯部編纂

日露陸海軍公報集

全六冊　各冊三十錢　郵稅六錢

第一卷自廿七年二月八日至廿七年七月六日
第二卷自廿七年七月七日至廿七年十一月三日
第三卷自廿七年十一月廿六日至廿八年一月十二日
第四卷自廿八年一月初旬至廿八年五月末
第五卷自廿八年六月初平和克復至廿八年十月順旅續編

外務省公示

開戰媾和日露交渉顚末

全一冊　定價四十錢　郵稅六錢

明治百三十八年教科書英國某憂國者著
日本高等小學校教科書日本某名士譯

英國衰亡論

全一冊　定價二十五錢　郵稅四錢

喜內芳樹著

歐米文學の手引（歐米讀書之栞）

全一冊　定價十八錢　郵稅二錢

二六新報記者編纂

讀者の栞　全一冊　定價二十五錢　郵稅不要

村井弦齋作
喜劇脚本　**酒道樂**　全一冊　定價二十五錢　郵稅四錢

村井弦齋作
脚本　**阿古屋及食道樂**　全一冊　定價二十五錢　郵稅四錢

英文書類

村井弦齋著　川井運吉譯
英文小說　**花子**　定價金拾圓　小包料　内地十五錢　外國五十六錢

村井弦齋著　川井運吉譯
英文小說　**阿古屋**　上製　定價一圓五十錢　郵稅十錢　並製　定價廿五錢　郵稅四錢

喜内芳樹編
英文　**日露戰爭公報集**　上卷　定價七十錢　郵稅六錢

文星堂發兌書目

在朝鮮吉倉凡農著
企業案内　**實利の朝鮮**　定價二十五錢　郵稅四錢

金錢物件　**貸借者顧問**　定價五十錢　郵稅八錢

陸軍大尉柏谷元陸軍通譯平井平三合著
日清露會話　定價五十錢　郵稅六錢

故勝海舟先生題言
座右の銘　定價二十錢　郵稅不要

前代議士菊地武德著
中上川彥治郎傳　定價四十錢　郵稅六錢

工學士者目田華津著
かるた必勝法　定價十七錢　郵稅二錢

堤秋水著
學生の寶　定價二十錢　郵稅二錢

木田寛栗著
繪畫の栞　定價五十五錢　郵稅十錢

日本畫手引草　定價二十錢　郵稅二錢

岡本毘石著
一語千金　俚諺集　定價十五錢　郵稅二錢

柏谷元著
日清會話　定價二十錢　郵稅二錢

平兆平三著
日露會話　定價三十錢　郵稅二錢

文魁堂發兌受驗用書目

系統的算術解法大極意　定價二十錢　郵稅四錢

算術解法の極意　定價十錢　郵稅二錢

代數解法の極意　定價十錢　郵稅二錢

幾何解法の極意　定價廿五錢　郵稅四錢

三角法解法の極意　定價廿五錢　郵稅四錢

代數因子分解活法　定價二十錢　郵稅二錢

方程式解法及吟味　定價廿五錢　郵稅四錢

聯立方程式解法及能不能　定價廿五錢　郵稅四錢

倫理應用算術解法の秘訣　定價三十錢　郵稅四錢

受驗用算術難問三百解　定價廿五錢　郵稅四錢

受驗用代數問題五百解　定價三十錢　郵稅六錢

算術短期上達法　正價十七錢　郵稅二錢

代數短期上達法　正價十七錢　郵稅二錢

幾何短期上達法　近刊

三角法短期上達法　定價十七錢　郵稅二錢

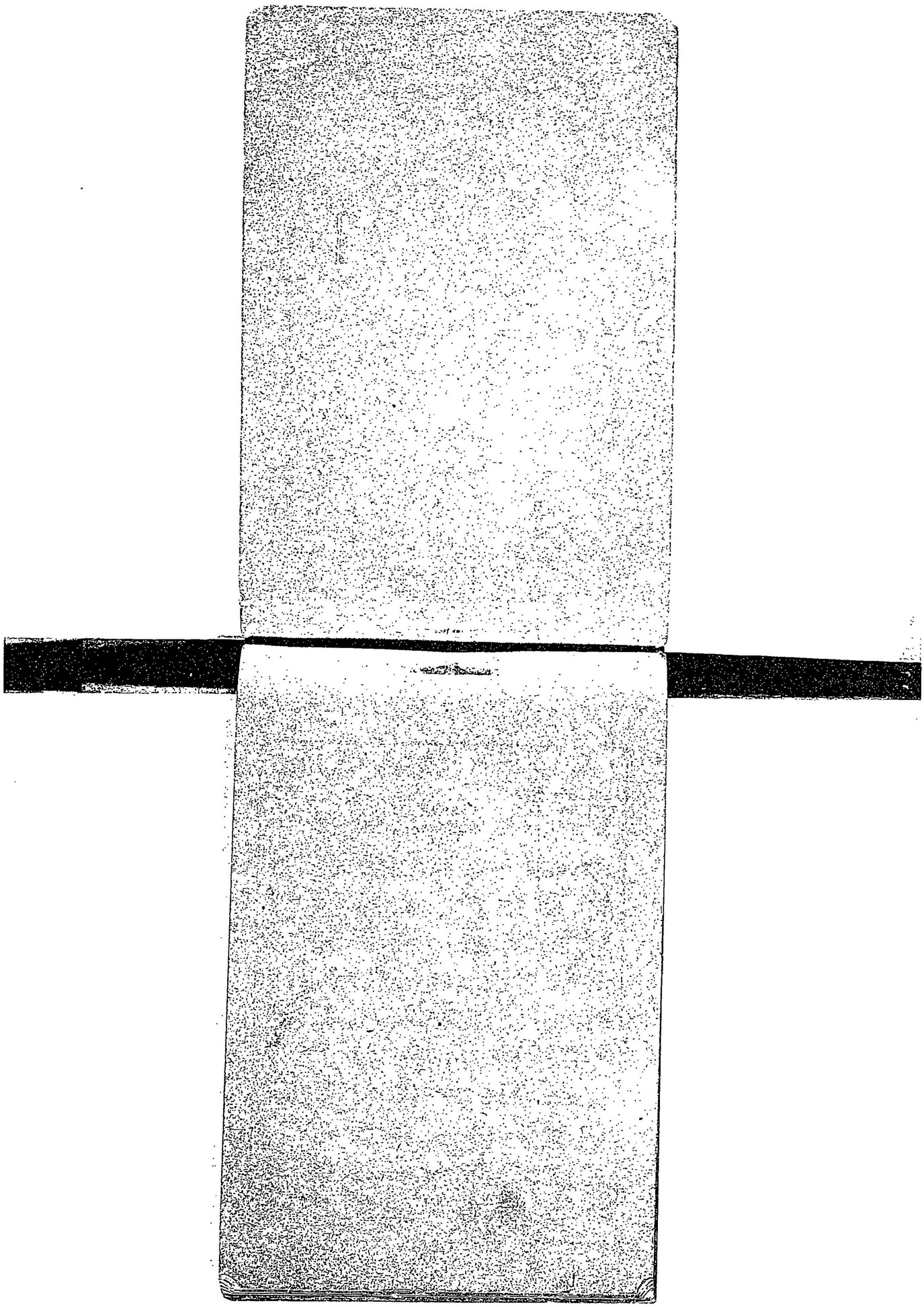
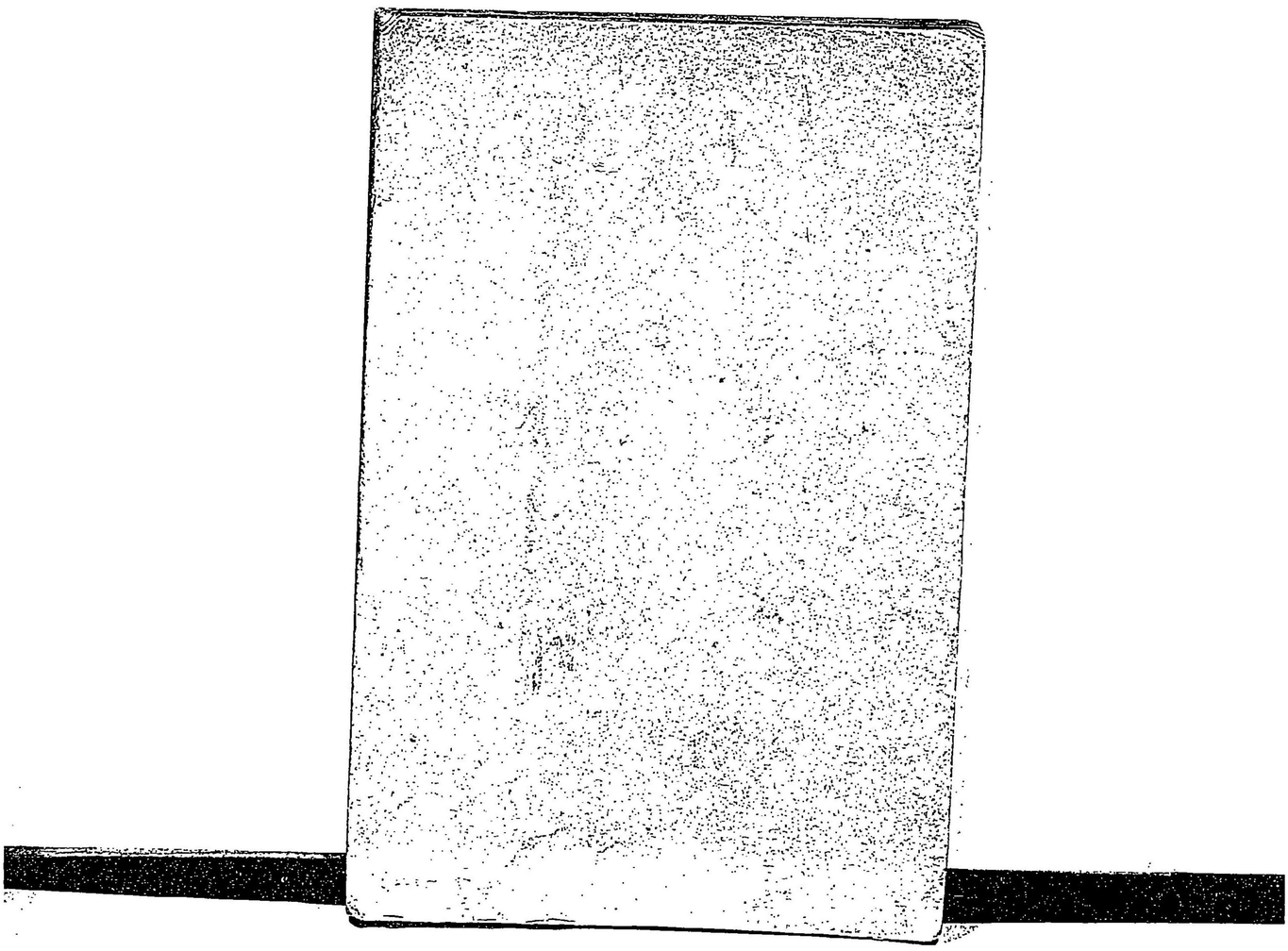
三週間豫備數學受驗法　定價三十錢　郵稅四錢

數學競爭試驗之受方　定價四十錢　郵稅四錢

二ヶ月前必讀西洋史受驗之極意　定價十二錢　郵稅七錢

補修算術應用三百題　定價五錢　郵稅不要

補修代數新撰三百題　定價五錢　郵稅不要

應用算術三十時間教科書　定價十錢　郵稅二錢

發行所　東京市日本橋區通四丁目　青野友三郎　電話本局三千百五十八番